

La Grange の *Registre* から見た座長 Molière

日 比 野 雅 彦

Dom Juan, Le Tartuffe, Le Misanthrope などの性格喜劇で知られる17世紀フランスの喜劇作家 Molière は、同時に、当時の代表的な劇作家 Pierre Corneille, Paul Scarron らの悲劇・喜劇、あるいは彼自身の30をこえる喜劇を演じた役者であり、また、Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne, Théâtre du Marais とならぶ Théâtre du Palais Royal⁽¹⁾ を率いる座長でもあった。喜劇作家としての Molière に関しては膨大な量の研究がなされているにもかかわらず、残る二つの面——役者としての Molière, 座長としての Molière ——に関する研究は極めて少ない。1928年に出版された Léopold Lacour の *Molière acteur*⁽²⁾, 1954年に刊行された René Bray の *Molière, homme de théâtre*⁽³⁾ 以後、まとまった研究書はほとんどなく、わずかに André Villiers の *L'Acteur Molière et l'expression du tragique*⁽⁴⁾, Roger Herzel の *Le Jeu <naturel> de Molière et de sa troupe*⁽⁵⁾ が目につく程度である。Lacour の研究は Molière の役者としての面に光をあてた貴重な文献ではあるが、Molière 全集の編者でもある Bray の、役者・座長・作家としての Molière を総合的にとらえ、彼の演劇世界を見事に分析した研究を前にすれば、いささか古さを感じさせるものとなってしまった。Villiers の論文は、Molière が悲劇役者としては三流であったとされている通説に反論を加える意欲的なものであり、Molière の劇団の表現方法について考察した Herzel の論文とともに、当時の舞台表現を知る上で貴重なものといえる。しかし、死の当日まで舞台に立ちつづけ、「芝居が成功するかしないかという心配」⁽⁶⁾ をたえず心に抱きつづけた Molière の座長としての面に関しては、上述の Bray の研究以外には、ほとんど目がむけられていない現状

である。

同時代の *Corneille* や *Racine* が純粹に劇作家として自分たちの作品を書きあげ、数多くの傑作を残したのに対し、*Molière* は、ある時は国王ルイ十四世の依頼で作品を書き、またある時は、自らの率いる劇団で上演するためにあわてて筆をとるというように、状況にせまられながら数多くの傑作を書き残した。この点で、彼の作品は、*Corneille* や *Racine* の作品とは異なる側面を示すはずであろう。しかし喜劇作家としてあまりに偉大であるためこの現実的な面が忘れられる傾向にある今日、劇作家としてではなく、演劇人としての *Molière* に光をあてることは、単に当時の演劇界の状況を知る上で有益であるだけでなく、彼の作品解釈の上でも新たな視点を提供できるのではないだろうか。

I

1643年、*Madeleine Béjart* らと *Illustre Théâtre* を結成した *Molière* は、当初から経済的な面で劇団を代表する地位にあったと考えられているが、名実ともに劇団の座長としての役割を担うのは、恐らく1652年をすぎたころであろう⁷⁾。*Illustre Théâtre* の挫折から *Paris* を離れることになった彼らが、どこでどのような作品を演じていたかは明らかではない、しかし、この *Paris* を離れていた時期に *Molière* の劇団は、後に *Jodelet* を継ぐ喜劇役者となる *Du Parc*、*Racine* の愛人とも噂され、夫の死後、*Andromaque* の主人公を演ずるため *Molière* の劇団を離れた *la Du Parc* をはじめ、一座の花形女優となる *la De Brie* とその夫 *De Brie* を新たに加え、主に南フランスで活躍したことが知られている。*L'Etourdi*、*Le Dépit amoureux* はこの時代に書かれた *Molière* の最初の本格喜劇である。出し物としては上記の喜劇の他に *Pierre Corneille*、*Tristan l'Hermitte*、*Du Ryer* の悲劇、*Scarron* の喜劇などが上演されていたようである⁸⁾。しかし、この時代に上演されたとされる作品はあくまで推測の域を出ないものが多い。そこで、ここでは、*Molière* が再び *Paris* に戻り、演劇活動を再開した1659年以降彼の死ぬ1673年2月17

日までの期間に、どのような作品が演じられ、また、どの程度、観客の評判を得たのかという点に限定して考えてみよう⁽⁹⁾。

我々は、Molière の一座が、いつ、どこで、何を演じ、それがどの程度の収入をあげたかという点に関して詳細に知ることができる。1659年の復活祭明けシーズンから加入した La Grange の *Registre*⁽¹⁰⁾ のおかげで、一座の活動のかなり細かい部分、例えば、劇団員の結婚・出産・死亡などの私的な事柄から、各公演ごとの団員一人あたりの分配金 part, 公演に必要な経費など、当時の役者の生活、劇団の仕組みを知る上で貴重な資料を手にすることができる。この *Registre* には、Molière の一座が本拠地とした Petit Bourbon 及び Palais Royal で上演された作品名が全て記録されているだけでなく、Versailles, Saint-Germain-en-Laye などで行なわれた国王主催の祝祭での上演、大蔵卿 Foucquet をはじめとする貴族の館で行なわれた私的な上演なども記されている。しかし、これら私的な上演は、とりわけ、それが長期にわたるものの場合には全ての上演作品名が網羅されていないこともあり、また、この種の上演に際して記された金額(劇団の受取額及び団員に対する分配金)は謝礼としての色彩が強く、その上演に対する成功の度合を測る上では不要と思われるため、ここでは、Petit Bourbon 及び Palais Royal での公演に関する資料を拠り所として、各々の作品がどの程度成功したかを調べてみよう⁽¹¹⁾。

1659年から Molière の死ぬ1673年までの間に彼の劇団で上演された作品は、La Grange の *Registre* によれば94を数え、1570日にわたる全上演日数に、のべにして2140作品が舞台にのせられている。上演日数とのべ上演作品回数との間に大きな差が生じるのは、当時の習慣として複数の作品が同じ日に上演されることが稀ではなかったためである。Molière がはじめてルイ十四世の前で演じた作品が Corneille の *Nicomède* と Molière の作と思われる *Le Docteur amoureux* であったように、五幕もの大作 (*grande pièce*) と一幕ものの小品が組みあわさることが多いが、その組みあわせは一定ではない。*Le Médecin malgré lui* のように、

ほとんどの場合、他の作品と組みあわせて上演されたものでも、単独で上演されることがある⁽⁴²⁾。そのため、複数の演目で上演された場合、各々の作品が一回上演されたものとした。

各公演の収入は、入場料の売上げによる。当時、一般に、平土間が15スー、後方の階段席 (amphithéâtre)、棧敷席はそれぞれ30スー程度であったらしい。また、初演の際には入場料は2倍とされ、さらに、上演作品が機械仕掛けの場合には特別料金が許されていたようである⁽⁴³⁾。これらの入場料の売上げから公演に必要な経費を除いた金額を劇団の構成員に分配し、各々の取り分が part と呼ばれていた。一つの劇団は、12ないし15 parts で構成され、作者兼役者でもあった Molière が一時的に 2 parts を占めたこともあったが、概ね、各団員に平等に分配されていた。各公演の成功の度合を調べるためにはこの分配金の金額を調べるのが最もよさそうな方法であるが、残念なことに分配金は、私的上演の際の謝礼の分配金とあわせて支払われることも多く、各公演毎の成功度を測るには不適當である。それ故、基準となる入場料の金額に高低があると考えられるものの、各公演毎の収入総額を、その作品の評価をはかる一つの目安とした。しかし、一般に公演は金曜・日曜・火曜の週3回行なわれ、各々の上演日の売上げ金額は種々の事情で変動することが考えられるため、各シーズンの総売上げ金額を上演回数によって割った平均値をもとめた。ただ、前述のように、複数の演目の場合、どちらがその公演の成功に貢献したかを判断するのは難しいため、便宜上、どちらの作品にも各々の収入があったと仮定した。これらをまとめたものが以下の表である。表1では Molière の作品が、表2では Molière 以外の作品が各年度ごとに、何回上演され、どの程度の売上げを示したかが記してある。

一回の公演でどの程度の収入をあげれば成功とみなしてよいのかという問題については、Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne, Théâtre du Marais の各公演に対する収入が不明のため断定はできないが、貴族の館での上演に対する謝礼が200—300リーヴルであったことから判断して、一応300リーヴルを越える収入をあげた公演は、ほぼ成功したものと考えて

さて、Molière の劇団の公演活動を具体的に見てみよう。1659年のシーズンは復活祭あけの4月28日、Corneille の *Héraclius* で幕が開けられる。Paris での最初の拠点となった Petit Bourbon は既に Scaramouche 率いる Théâtre Italien の拠点でもあったため、Molière の一座の使用できる曜日は「定例の上演日 (jours ordinaires)」一火曜・金曜・日曜一を除いた「特別の上演日 (jours extraordinaires)」であった。しかし、7月中旬以降は、Théâtre Italien が Paris を離れたため、定例の上演日に公演が行なえるようになる。このシーズン中に上演された作品は Molière の *L'Etourdi*, *Le Dépit amoureux*, そして最初の成功を獲得した *Les Précieuses ridicules*, Pierre Corneille の悲劇 *Héraclius*, *Rodogune*, *Cinna*, *La Mort de Pompée*, *Le Cid*, *Horace*, 喜劇 *Le menteur*, Scarron の喜劇 *Jodelet maître écolier*, *Don Japhet d'Arménie*, *Héritier ridicule*, Tristan l'Hermitte の悲劇 *Mariane*, *La Mort de Crispe* など、当時評判の高かったものである。初演ものとしては上記 Molière の *Précieuses* の他は、Coqueteau の *Pyrade*, Magnon の *Zénobie* の2つの悲劇の名があげられている。Paris ではまだ無名に近い劇団が既存の二大劇団を相手に観客をひきつけようとすれば、当時人気であった作家の定評のある作品をレパートリーに加える必要があったのであろう。事実、Corneille の悲劇の上演は、回数ではさほど多くないものの、そこそこの収入をあげていたようである。しかし、今日と違い、新作の上演を常に要求された当時、既存のしかも評価の定まった作品ばかり上演するわけにもいかず、Coqueteau, Magnon という、まだ無名の作家たちの作品をレパートリーに加えている。Pierre Corneille は主に Théâtre du Marais のために、弟の Thomas Corneille, Quinault は Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne のために作品を書いていた当時、Molière の劇団はまだ無名の作家に依頼するより他に方法はなかったのであろう。新作の中で大成功といえる成績をあげたのは Molière の *Précieuses* だけ

表1

	1659	1660	1661	1662	1663	1664	1665	1666	1667	1668	1669	1670	1671	1672	1673
<i>Etourdi</i>	24	7	3	5	2	7	5	1	4	4	368	4	278	2	225
<i>Debit amoureux</i>	18	379	412	323	184	257	226	206	439						
* <i>Précieuses ridicules</i>	31	314	407	422	190	273	180	161	308						
* <i>Sganarelle</i>	625	400	330	5	19	9	4	192	4	253	166	215	270	299	298
* <i>Dom Garcie (ch)</i>	42	450	362	223	2	347	325	195	291	6	6	8	4	2	
* <i>Ecole des maris</i>	6	409	875	9	13	7	4	4	5	6	3	6	2	4	4
* <i>Frascheux (cb)</i>	48	543	194	6	14	10	3	11	470	210	220	170	324	240	310
* <i>Ecole des femmes</i>	44	771	403	31	37	6	9	264	522	2	156	221	336	4	375
* <i>La Critique de L'Ecole des femmes</i>			908		35	814	272			3	210				
* <i>L'Impromptu de Versailles</i>					20	838									
* <i>Mariage forcé (cb)</i>					12	607			8	2	123			14	497
* <i>La Princesse d'Elide (cb)</i>						727			382						
* <i>Dom Juan</i>						25	611								
* <i>Amour médecin (cb)</i>						15	1340								
* <i>Misanthrope</i>							35	505	10	8	1	6	1	2	528
* <i>Médecin malgré lui</i>									356	345	150	412	143	4	5
									4	5	3	7	4	5	531
									544	437	184	360	234	1	1
									8	4	269	3	244	1	128
									496	300			257		

* Sicilien (cb)	17									1	2	
	178									1205	442	
* Tartuffe	1									28	11	4
	1890									462	460	319
* Amphitriton	29									6		6
	680									204		386
* Avare										9	6	8
										495	414	359
* George Dandin (cb)										10	3	3
										245	324	258
* M. de Pourceaugnac (cb)										26	7	5
										591	448	347
* Bourgeois gentilhomme (cb)										24	14	10
										1003	509	445
* Les Fourberies de Scapin											18	
											425	
* Les Femmes savantes												
											11	13
* La Comtesse d'Escarbagnas (cb)											1162	470
												18
* Le Malade Imaginaire (cb)												4
												1637
Le Médecin volant	3	3	2	1	4							
	191	260	157	166	321							
* Psyché (tb)											51	962
											31	972
Molière 上演作品回数	73	95	118	60	161	86	65	109	84	103	96	135
総上演回数	146	118	125	109	119	96	112	92	90	124	78	127
総上演作品回数	175	189	183	120	211	121	133	144	150	189	105	135

数値の上段は上演回数、下段は平均観入額 (単位はリール)

*印は初演作品 ch = comédie héroïque cb = comédie ballet tb = tragédie ballet.

であった。*Zénobie* は4日目には完全に失敗し、*La Grange* の *Registre* には「un four」と記され、収入・分配金のいずれも空白のままとなっている。統計上ではそれほど低い数値を示していないのは、この作品が一時期、*Précieuses* と組みあわせて上演されたからである⁽¹⁴⁾。*Corneille* の作品の中では喜劇 *Le menteur* が想像以上に低い数値を示している。悲劇より喜劇の上演に評価されていた *Molière* の劇団が、得意のはずの喜劇の分野でそれほどの成功をおさめていなかったことは、逆に、一部の悲劇でそれほど低い数値を示していないこととあわせて、興味深いことといえよう。

1660年のシーズンでは *Molière* の *Sganarelle ou le Cocu imaginaire*, *Dom Garcie de Navarre*, *Le Médecin volant*, *Gilbert* の *La Vraie et la fausse Précieuses*, *Endimion*, *Huon de Bordeaux*, *Tyran d'Égypte*, *Montauban* の *Félicie* などが加わる。*Molière* の *Dom Garcie* は彼の唯一の英雄喜劇であるが、他の喜劇とは異なり、初演後6回の公演を数えたのち中止されている。数字の上ではかなりの収入をあげているにもかかわらず短い公演期間で中止されたのは、評判が予想より悪かったためであろう。一方、*Sganarelle* は大好評を博し、手頃な長さの作品であることも手伝ってか、以後、毎年欠かさず上演されることになる。*Gilbert* の *La Vraie et la fausse Précieuses* はタイトルから想像されるように、前年の *Les Précieuses ridicules* の上演の結果ひきおこされた一連の論争に関連する作品である。この年は、しかしながら、10月に拠点の *Petit Bourbon* の使用が禁止されたため、全公演日数は少なくなり、翌1661年1月20日に *Palais Royal* を拠点として新たに出発するまでの約3ヶ月間を、貴族の館などでの私上演のみに頼らざるをえなくされ、最初の危機をむかえることになる。

次の1661年にはじまるシーズンは、*L'École des maris* の成功によって、*Molière* 一座が喜劇の世界での地位を確固たるものとしたシーズンである。初演の日の売上げ410リーヴルは上演回数を重ねるごとに上昇し、7月8日には1131リーヴル、10日には1132リーヴルにまで達する。この三幕

もの喜劇は常に他の作品と同時に上演された。Gilbert の *Huon de Bordeaux*, *Tyran d'Egypte*, Corneille の *Nicomède*, *Héraclius*, *Rodogune* などの名前が記されている。さらに、このシーズンは Molière 最初の *comédie-ballet*, *Les Fâcheux* が上演されている。8月に大蔵卿 Foucquet の Vau の館で初演された *Les Fâcheux* は11月には Palais Royal の出し物として Paris の観客の前に姿を見せ、翌年の2月末まで、ほとんど休む間もなく上演され、莫大な収入をあげている。Foucquet の館で上演されたものにくらべれば壮大さの点で劣りはするが、音楽とバレエをともなった新しい *comédie-ballet* が Paris の観客の関心を大いに集めたのであろう。*Les Fâcheux* の上演された冬のシーズンには他の作品はほとんど見られず、全期間を通して見た場合でも、上演作品の中で Molière 以外の作品が占める割合はほぼ30%にまで低下する。

1662年のシーズンの前半は話題となる新作にも恵まれず、評価の定まった作品をいくつか舞台にのせているだけである。しかし5月23日には、前のシーズンに大成功を獲得した *L'Ecole des maris* が無残にも「four」を味わっている。Molière の一座が、悲劇ではなく喜劇で、しかも Molière の作品で失敗している点が興味深い。いずれにせよ、上演作品に困ったためか、Molière は Théâtre du Marais で初演されたばかりでまだ出版のされていない Pierre Corneille の *Sertorius* を Palais Royal で上演している。Scarron, Rotrou らの作品の上演や Molière の旧作で間をつなぎながら、11月には Prade の悲劇 *Arsace* を初演するが成功せず、ついで Boyer の悲劇 *Oropaste* を初演している。後者はそこそこに成功したようで、15回上演され、600リーヴルを越す売り上げも記録されている。12月末には Molière の新作 *L'Ecole des femmes* が上演され、それまでの沈滞した雰囲気を一掃する大成功をおさめている。3月9日にシーズンが終了するまでに31回の上演を数え、中には1500リーヴルを上まわるものも見られる。

1663年のシーズンは再び Tristan l'Hermite の悲劇 *Mariane*, Corneille の *Cinna*, *Sertorius* で幕を開ける。同時に上演された Molière

の小品の人気も手伝ってかこれらの作品はかなり高い数値を示している。6月には、*L'Ecole des femmes* をめぐる論争に対する作者の反論 *La Critique de l'Ecole des femmes* が上演され、再び Paris の観客の注目を集め、さらに11月には Hôtel de Bourgogne の役者たちを皮肉った *L'Impromptu de Versailles* が舞台にのせられ、論争に油をそそいでいる。この一幕物の小品は、1661年に初演して無残な結果におわった Molière の唯一の英雄喜劇 *Dom Garcie* の再演と組みあわせて上演されている。Hôtel de Bourgogne の役者たちの誇張した発声法を徹底的にからかい、自分の劇団の自然な表現法を対置させた Molière が、その実践を自らの作品で繰りひろげたとも考えられるこの試みは、しかしながら、彼の唯一の英雄喜劇を蘇生させるには至らず、二度の公演の後、Tristan l'Hermite や Corneille の作品にとってかわられることになる。1月には、劇団の役者 Brécourt の手になる *Le Grand Benêt de fils* が初演され、かなりの成功をおさめたようである。つづく2月には、Molière の2作目の comédie-ballet である *Le Mariage forcé* が Palais Royal の舞台にのせられ、*Les Fâcheux* 同様、バレエと音楽をともなり壮麗な作品に Paris の観衆は大いに喜んだようである。

1664年のシーズンでは6月に Racine の悲劇 *La Thébaidé* の初演が見られる。後の大悲劇作家のデビュー作は、演じた役者が Hôtel de Bourgogne の悲劇役者ではなく、喜劇に定評のあった Palais Royal の役者であったためからか、16回の上演を数えるもののさほどの成功はおさめていない。しかし、久々の悲劇の初演であり、Molière 以外の作品の上演数35回のうち16回を数える点で、座長 Molière の若き悲劇作家に対する力のいれようが窺われよう。秋には Molière の第3作目の comédie-ballet, *La Princesse d'Elide* が上演され、シーズンの終わりには *Dom Juan* が舞台にのせられている。この時期以後20世紀に至るまで姿を見せなかったこの作品は、驚異的な成功をおさめ、初演時に1830リーヴル、5日目の2月24日は2390リーヴルの収入をえている。

1665年のシーズンでは M^{lle} Desjardins の悲喜劇 *Le Favory* が初演さ

れ、春及び初秋に計23回の上演が記録されている。また9月には Molière の comédie-ballet, *L'Amour-médecin* が初演され、4月初めのシーズン終了までに断続的に35回にわたって上演されている。12月には Racine の第2作 *Alexandre le Grand* も上演され、1000リーヴルを越える日も見られるほどの成功をおさめた。しかし、Molière の劇団の悲劇上演を不満に思っただけか Racine は Hôtel de Bourgogne でも同じ作品を上演させるという背信行為をし、好評であった作品も9回の上演で打ち切れ、作者に対する分配金も支払われないという事態を招くことになる。

1666年のシーズンには *Le Misanthrope* が初演されるが、先のシーズンの *Dom Juan* ほどの成功はおさめていない。8月には *Médecin malgré lui* の初演が行なわれている。どちらもシーズン中に35回の上演を数え、収入も平均で500リーヴルを越え、評判が高かったといえる。一方、Racine と決定的に仲違いをした Molière は、悲劇の上演を断念したわけではなく、*L'Ecole des femmes* をめぐる論争の中で敵対していたはずの Pierre Corneille の *Attila* を初演する。シーズン最後をかざるこの悲劇は初演時には1027リーヴルをあげ、シーズン終了までの11回で平均435リーヴルの収入をえている。

1667年は Corneille の *Attila* の再演と Donneau de Visé の *La Veuve à la mode* の初演で幕を開けたが、両者とも成功にはほど遠く、また、Molière の新しい comédie-ballet, *Le Sicilien* も思ったほどには成功せず、200リーヴルを下回る公演が数多く見られる。8月に、1664年 Versailles で最初の3幕が上演され話題となったものの上演禁止に処せられた *Le Tartuffe* が *L'Imposteur* と名を変えて上演され、1890リーヴルの収入をあげる大成功をかちとったが、またしても上演が禁じられ、わずか1回の公演で姿を消してしまう。Molière の一座は苦境に立たされ、Donneau de Visé の田園喜劇 *Délie*, 喜劇 *L'Accouchée*, 一座の役者でもある La Thorillière の悲劇 *Cléopâtre* などを上演するが、いずれもそれほどの成功をおさめるには至らなかった。翌1月13日の Molière による *Amphitrion* の成功以外、評判となる作品がほとんどない一座に

としてはつらいシーズンとなった年でもある。

1668年からのシーズンも、前半は目ぼしい作品がなく、*Corneille* や *Donneau de Visé* の旧作を交互に上演せざるをえず、また、*Hôtel de Bourgogne* で上演された *Racine* の *Andromaque* を批判する *Subligny* の *La Critique d'Andromaque* の上演も、回数としては27回を数えるものの収入としては成功したとはいえない数値しか示していない。*Molière* の新作 *L'Avare* 及び *George Dandin* が相ついで上演されるが、かつて *Molière* の新しい作品が *Paris* 中の話題を集めたような驚異的な成功をもたらすには至らなかった。シーズン最後の2月5日に、かつて二度上演が禁じられた *Le Tartuffe* がやっと人々の前に姿を見せ、一座の売り上げは一挙に増加する。4月9日にシーズンの幕を閉じるまでに28回の上演を数え、2000リーヴルを越す収入をあげる公演も幾度か見られるほどであった。

1669年から70年にかけて初演された作品は *Molière* の *comédie-ballet*, *Monsieur de Pourceaugnac* と、彼の作と思われる小品 *Le Fin fourdaud* しかない極めて貧弱な年である。上演された作品としては *Le Tartuffe* が28回を占め、次いで *Monsieur de Pourceaugnac* が26回の上演を数える以外は、*Molière* の旧作が見られるにすぎない。*Le Fin fourdaud* を除けば *Molière* 以外の作品は一つも見られない。これは、このシーズンの期間中、何度も国王の依頼で *Palais Royal* を離れねばならなかったことも一つの大きな理由であろう。

1670年から71年にかけてのシーズンには *Subligny* の *Désespoir extravagant* の初演が見られ、また、11月には *Molière* の *comédie-ballet*, *Le Bourgeois gentilhomme* と *Corneille* の *Tite et Bérénice* の初演が行なわれている。*Subligny* の作品は16回の上演回数にもかかわらずそれほどの成功はおさめていないが、*Molière* と *Corneille* の初演は、各々1週間毎の上演という珍しい試みも手伝ってか大成功をおさめ、3月のシーズン終了までに、前者は24回、後者は21回の上演が行なわれ、それぞれ、1003リーヴル、732リーヴルの収入をあげている。

71年から72年にかけてのシーズンには Palais Royal の改装工事が行なわれ、機械仕掛けの作品の上演が一層容易になり、Corneille, Quinault, Molière の合作になる壮大な tragédie-ballet, *Psyché* が上演され、大成功をおさめている。7月24日から翌年の3月6日までに51回もの上演が行なわれ、962リーヴルという高い数値を示している。改装工事中には Molière の *Les Fourberies de Scapin* が上演され、また、シーズンの最後には *Les Femmes savantes* の初演も行なわれている。しかし、72年の2月には、Molière が Paris で Illustre Théâtre を結成して以来の仲間であった Madeleine Béjart を失っている。

1672年にはじまる Molière の最後のシーズンは、2つの comédie-ballet の初演が行なわれている。1つは *La Comtesse d'Escarbagnas* であり、他の1つは Molière の白鳥の歌となった *Le Malade imaginaire* である。この年の上演作品には *L'Etourdi*, *Le Misanthrope* などの喜劇も見られるが、最も多く舞台にのせられたものは、*Psyché* をはじめ、*Le Mariage forcé*, *Le Bourgeois gentilhomme*, *La Comtesse d'Escarbagnas*, *Le Malade imaginaire* といった、バレエと音楽と演劇が一体となった作品である。そして、その中の1つ *Le Malade imaginaire* の4回目の公演の直後、Molière は息をひきとったのである。

あらためて Molière の一座の上演作品のレパートリーをみてみると、Paris でまだ確固たる地位をえていなかった60年代前半は、作者としての Molière もまだ一座に十分なレパートリーを提供するには至らず、Corneille, Scarron をはじめとする既存の、しかも定評のある作品を多く手がけ、次第に Molière 以外の作品がレパートリーから消えていったことがわかる。また、初期には悲劇をかなり上演していた。しかし、Molière の作品ではかなりの成功をおさめているものの、その他の作品では、悲劇喜劇を問わず、それほど成功をおさめてはいない。喜劇の上演で定評があった Molière の一座でありながら、Molière 以外の喜劇ではそれほど高い評判をえられなかったのは、Scarron らの既存の作品が「すでに成功

をくみつくしてしまった」⁽¹⁵⁾ からであり、また、Jodelet の死が象徴するように、観客の好みは、かつての役者個人の芸を対象とするものから、世の中を反映する自然なものへと移りつつあったからであろう⁽¹⁶⁾。

また、悲劇の上演回数は、初期には全体の25%を占めることもあったが次第に減少し、1669—70年にはついに一度も上演されないところまで行きつく。しかし、Molière の一座が悲劇を完全に断念したのではなく、翌シーズンには Pierre Comeille の *Tite et Bérénice* が、次の1671—72年には Corneille. Quinault, Molière の合作による *Psyché* が初演され、特に後者は1672年からのシーズンでも31回の上演を数える。あとで再び言及することになる役者 Molière はともかく、座長 Molière は、彼の一座が悲劇の世界でも十分通用することを証明したといえるかもしれない⁽¹⁷⁾。

しかし、それ以上に注目すべきことは、1659年の *Pyrade, Zénobie* にはじまり、1660—61年の *Endimion, Huon de Bordeaux, Tyran d'Egypte*, 1662—63年の *Arsace, Oropaste*, 1664—65年の *La Thébaïde*, 1665—66年の *Alexandre le Grand, Le Favory*, 1666—67年の *Attila*, 1667—68年の *Cléopâtre*, そして1670—71年の *Tite et Bérénice*, 1671—72年の *Psyché* と、ほぼ毎年のように悲劇もしくは悲喜劇の新作を発表しつづけていることである。観客の好みは悲劇から喜劇へと移行し、喜劇が全盛期をむかえた1660年代⁽¹⁸⁾ に、しかも、喜劇の上演では評価が定まり、悲劇では逆に認められていなかった Molière の劇団が何故、このように悲劇を多く世に出さねばならなかったのか、疑問が残るところである。しかし、この問題に入る前に、Molière の劇団と同じ時期に活躍した Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne と Théâtre du Marais の活動にも目をむけてみよう。

II

Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne は Paris に最も古く設立された劇団であり、また、国王からも厚く庇護され、Molière が活躍するはるか以前から Rotrou, Tristan l'Hermitte, Du Ryer ら当時の演劇界を代

表する劇作家の作品を次々と手がけ、Paris の最も代表的な劇団であった。1620年代には Gaultier-Garguille, Gros-Guillaume, Turlupin によるファルスで人気を博していたが、彼らの死後は悲劇の上演に定評があった。Molière が活躍した1660年代には Montfleury, Floridor, Beauchasteau, La Fleur, La des Œillets らの悲劇俳優, Raymond Poisson らの喜劇俳優を擁していた。Molière が *Les Précieuses ridicules* の中で

[……] Il n'y a qu'eux [les comédiens de l'Hôtel de Bourgogne] qui soient capables de faire valoir les choses; les autres sont des ignorants qui récitent comme l'on parle; ils ne savent pas faire ronfler les vers, et s'arrêter au bel endroit: (sc. ix)

と皮肉をこめて描写していることから想像できるように、彼らの悲劇における演技は当時の模範とも見なされていた。また、*La Thébaidé* の初演を Molière の劇団に託し、第2作の *Alexandre le Grand* の上演にも Molière の力を借りた Racine が結局 Molière の劇団の悲劇の上演能力に絶望し、Hôtel de Bourgogne へ作品を提供したことはよく知られている。

しかしながら、彼らのレパートリーにも喜劇が数多く見られ、特に Raymond Poisson 演じる Crispin を主人公とする作品がしばしば上演されている。Hôtel de Bourgogne でのレパートリーについては、Molière の劇団に関する La Grange の *Registre* に相当するものがないため不明の点が多いが、そこで初演された作品の題名は、Deierkauf-Holsboer 女史の *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne* において詳しく調べられている⁽¹⁹⁾。Molière が活躍した1659年以降の初演作品として以下のものがあげられている。

1659年には Boyer の悲劇 *Fédéric*, Deschamps の悲喜劇 *Le Festin*

de Pierre, また、喜劇では Molière の *Les Précieuses* によって火蓋が切っておとされた喜劇論争にまつわる *Les Véritables Précieuses* などの作品が上演されている。次の1660年には悲劇としては Thomas Corneille の *Stilicon*, Boyer の *La Mort de Démétrius*, 悲喜劇では Quinault の *Stratonice*, 喜劇では Deschamps の *Les Ramoneurs*, Th. Corneille の *Le Galant doublé*, 俳優 Montfleury の息子が書いた *Le Mariage de rien*, 作者不詳ではあるが明らかに Molière の *Le Cocu imaginaire* のパロディーと考えられる *Les Amours d'Alcippe et de Céphise ou la Cocue imaginaire* がある。1661年には悲劇の分野では Boyer の *Tigrane*, *Policrite*, Th. Corneille の *Camma*, 喜劇の分野では R. Poisson の *Lubin*, *Le Baron de la Crasse*, Montfleury の *Les Bêtes raisonnables* の名があげられている。

1662年には、悲劇では Th. Corneille の *Maximian*, *Persée et Démétrius*, 悲喜劇では M^{lle} Desjardins の *Manlius*, Quinault の *Agrippa* の2つが初演され、また喜劇では Chappuzeau の *Colin-Mailard*, *Le Riche mécontent*, *Avare duppé*, Montfleury の *L'Ecole des jaloux* の上演が記録されている。このうち最後の作品はタイトルが示すように Molière の *L'Ecole des maris* を意識したものである。また、この年には Théâtre du Marais で初演されたばかりの Pierre Corneille の *Sertorius* も上演されている。

1663年には Pierre Corneille の *Sophonisbe*, M^{lle} Desjardins の *Nitétis*, Gilbert の 田園劇 *Les Amours d'Ovide*, Montfleury の 悲喜劇 *Trasibule*, 喜劇では Gilbert の *Les Intrigues amoureuses*, Poisson の *Le Fou raisonnable*, F. Pascal の *Le Vieillard amoureux*, Boursault の *Nicandres* の他に、Molière の *L'Ecole des femmes* をきっかけとする論争にまつわる作品もいくつか上演されている。

1664年には Corneille 兄弟の作品が仲良く名をつらねている。兄 Pierre の *Othon*, 弟 Thomas の *Pyrrhus* の 悲劇が初演され、また、Gilbert の 悲喜劇 *Les Amours d'Angélique et de Médor*, Boursault の題

名不詳の田園劇, Montfleury の *Le Mary sans femme*, Poisson の *L'Après-soupe des auberges* の喜劇が初演されている。

1665年は悲劇では Quinault の *Astrate* が初演され, Boyer の *Porus* が再演されている。この作品は Palais Royal で初演された Racine の *Alexandre le Grand* に対抗して上演されたが数回の上演で姿を消し, 変わって Racine の作品が Hôtel de Bourgogne の舞台でも同時に上演されるという奇妙な事態が出現する。Palais Royal との対立は, 喜劇でも見られ, この年に上演された Montfleury の *L'Ecole des filles* は Molière の *L'Ecole des femmes* のパロディーであり, また Quinault の *La Mère coquette* は Palais Royal で演じられた Donneau de Visé の同名の作品の剽窃であつたらしい。しかし, 両者とも評判はさほどよくはなかつたようである。

1666年には Pierre Corneille の悲劇 *Agésilas*, Thomas Corneille の悲喜劇 *Antiochus*, Molière の劇団から移籍した Brécourt の2つの喜劇 *Jaloux invisible*, *Noce de village* の名があげられている。つづく1667年には初演作品が少なく Racine の *Andromaque* と Thomas Corneille の喜劇 *Le Baron d'Albikrac* しか見られない。

1668年には悲劇は Th. Corneille の *Laodice*, Quinault の *Pansanius* の2つがあげられているにすぎないが喜劇では数多くの初演作品が見られる。Racine の *Les Plaideurs*, Breton の *L'Amant qui ne flatte point*. Poisson の *Le Poète basque*, *Les Faux Moscovites*, Montfleury の *La Femme juge et partie* が上演されている。

1669年には悲劇の初演が増加し, Boyer の *Le Jeune Marius*, Th. Corneille の *La Mort d'Annibal*, Racine の *Britannicus* の名があげられている。他方喜劇では68年の *La Femme juge et partie* の続編として *Le Procès de la femme juge* が上演され, また Hauteroche の *Le Souper mal apprêté* が初演されているにすぎない。

1670年の悲劇の初演は Racine の *Bérénice* しか見られない。喜劇では Hauteroche の *Crispin médecin*, Th. Corneille の *La Comtesse*

d'Orgueil, Montfleury の *Le Gentilhomme de la Beauce*, Poisson の *Les Femmes coquettes* が初演されている。つづく1671年から72年にかけては悲劇では Quinault の *Bellérophon*, Racine の *Bajazet*, Th. Corneille の *Ariane*, *Théodat* が初演され、また Champmeslé の 田園劇 *L'Heure du berger* も初演されている。喜劇では Montfleury の *La Fille capitaine*, Champmeslé の *Les Grisettes*, Hauteroche の *Le Deuil*, Poisson の *La Hollande malade* が初演されている。Molière の最後の年1673年には Racine の *Mithridate* の名があげられている。

悲劇の世界では不動の地位にあった Hôtel de Bourgogne も、当時のレパートリーから見ると限りでは喜劇にもかなりの力を注いでいたことが窺われる。しかし、Molière の劇団で初演された作品が全て成功したわけではなかったように、Hôtel de Bourgogne で初演された作品の中にもかなり当りはずれがあったようである。例えば、今日ではほとんど上演されることがないものの、当時最も愛好された劇作家の一人 Thomas Corneille の *Laodice* は、初演の時にはかなり評判になったにもかかわらず、すぐにレパートリーから消えてしまったという⁽²⁰⁾。当時の記録が残されていないため正確なことはわからないが、*Les Plaideurs* を含めた Racine の作品を除けば、他の作家の作品は悲劇・喜劇を問わず、かなりの当りはずれがあったようである。

また、悲劇で一世を風靡していた Hôtel de Bourgogne とはいえ、Molière の登場とともに変化してきた喜劇全盛の流れにはさからえず、数多くの喜劇を初演していることも注目されよう。

Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne と並ぶもう一つの劇団 Théâtre du Marais は Pierre Corneille の作品の上演で知られ、また、1630年代の悲喜劇全盛期の中心ともなった劇団であるが、座長兼俳優の Mondory の死、Hôtel de Bourgogne による度重なる人気俳優の引き抜き工作、また、一座の人気喜劇役者 Jodelet の Molière の劇団への移籍、あるい

は劇場の火災などの事件も重なり、1660年頃にはかつての人気を失っていた。しかし、再建された劇場は機械仕掛けの作品の上演に適しており、いくつかの大掛りな作品の上演で Paris の観客の人気を集めていた。また、Molière の一座や Hôtel de Bourgogne の劇団とは異なり、しばしば Paris を離れ地方で公演することもあったようである。再び Deierkauf-Holsboer 女史の調査⁽²¹⁾によれば、この劇団の1660年代初めから70年代初めにかけての主な上演作品は以下のようである。

1661年に、しばらく作品を書くことから遠ざかっていた Pierre Corneille の大スペクタクル作品 (pièce à grand spectacle) *Toison d'Or* が初演され、久々に Théâtre du Marais は賑わいを見せ、また、作者不詳の作品 *Erixène*、一座の役者でもあった Chevalier の喜劇 *Les Galans ridicules*, *Désolation des filoux* が上演されている。

1661—62年のシーズンには上述の *Toison d'or* の再演に加え、同じ Pierre Corneille の悲劇 *Sertorius* が初演されている。好評のためか、この作品はまだ出版もされないうちから Molière の劇団でも上演され、また Hôtel de Bourgogne でも公演が行なわれている。しかし三劇団によって演じられることは Théâtre du Marais から観客を奪う結果をも招いたようである。また、大スペクタクル劇としては Chapoton の *Descente d'Orphée aux Enfers* が初演されている。

1662—63年のシーズンは上記 Chapoton の大スペクタクル劇の再演の他には、Boucher の笑劇 *Champagne le coiffeur*, Chevalier の喜劇 *Les Barons amoureux*, *Disgrace des domestiques*, *Intrigues des carrosses à cinq solz*, *Les Amours de Calotin* の初演が見られる。これらの喜劇がどのような評判をとっていたかはわからない。

1663—64年には *Toison d'or* の再演と Chevalier の喜劇 *Paedagogue amoureux* の初演が記録されている他には目立った動きはなく、つづく1664—65年のシーズンにも、同じ Chevalier の *Aventure de nuit* の名が記されているだけである。

Corneille, Chapoton 以後、大スペクタクル劇にも恵まれなかった

Théâtre du Marais は、1665年秋に Boyer の新作 *Les Amours de Jupiter et de Sémélé* を発表する。これは、機械仕掛けの作品の中でも特に音楽の占める比重が高く、いわゆるオペラと非常に近いものであったらしい。壮麗なこの作品の上演は大成功をおさめたが、Théâtre du Marais では他に評判となるような作品もほとんどなく、1666—67年、及び1667—68年のシーズンにはこのオペラの再演以外、ほとんど活動らしいものを見せていない。唯一、Chevalier の喜劇 *Le Soldat malgré luy ou le soldat poltron* の初演が記されているだけである。

1668年2月、王位継承戦争がフランスの勝利におわると、Théâtre du Marais はルイ十四世の勝利をたたえる作品を Boyer に依頼した。その時に書かれた作品が、音楽とバレエを伴う田園劇 *Fête de Vénus* である。久々の新作大スペクタクル劇は Paris の観客の人気を集め、大成功をおさめている。

翌1669年には Molière の *Dom Juan* に着想をえた Rosimond の悲喜劇 *Le Nouveau Festin de Pierre* が初演され、また、しばらく Molière の劇団にいくつかの喜劇を書いていた Donneau de Visé の喜劇 *Les Intrigues de la Lotterie*、Rosimond の *L'Avocat sans étude* の初演も行なわれ、特に Rosimond の喜劇は評判がよかったようである。また、1670年にかけて Boyer の英雄喜劇 *Polycrate*、Donneau de Visé の大スペクタクル劇 *Les Amours de Vénus et d'Adonis*、Rosimond の喜劇 *Les Trompeurs trompés ou les Femmes vertueuses* が初演され、久々に活気を取りもどしている。

1670—71年には、Rosimond の *La Dupe amoureuse*、Donneau de Visé の *Le Gentilhomme Guespin* が Paris の観客を楽しませた後、同じ Donneau de Visé による機械仕掛けの悲劇 *Les Amours du Soleil* が上演されている。この、作者自ら「Théâtre du Marais で上演された中で最も壮大なスペクタクル」⁽²⁴⁾ と称する悲劇は Paris の観客に好評をもってむかえられ、1671年秋にも再演されている。つづく1671—72年のシーズンは、Donneau de Visé の悲劇の再演に加え、同じ作者の英雄喜劇

Le Mariage de Bacchus et d'Ariane, Boyer の田園劇 *Lisimène ou la Jeune Bergère*, Rosimond の喜劇 *Qui pro quo ou le Valet étourdi* が初演され、それぞれ、かなりの成功をおさめている。

このように、主として大スペクタクル劇に活路を見出したものの、1672年3月、Molière と共同で仕事をしたこともあり、またルイ十四世に愛されていたイタリア生れの音楽家 Lully が、音楽を伴う演劇の上演権を独占したため、Théâtre du Marais は再び苦境に陥ることになる。1672年にはじまるシーズンは、それまでの3シーズンの賑いとはうってかわり、大スペクタクルの見られない寂しいシーズンとなる。この時期に再度、Corneille が手をさしのべ、*Pulchérie* が初演されている。かつてこの劇団に数多くの作品を提供し、17世紀中葉を代表する長老の手になるこの英雄喜劇は、既に時代の流れとは距たりを生じていたため、かつて Corneille の作品がもたらしたほどの成功はえられなかったようである。同じ時期に Montfleury の悲劇 *L'Ambigu comique ou les Amours de Didon et d'Enée* も上演されたが、こちらはかなりの評判をえたようである。しかしながら、大スペクタクルが上演できなくなったことによる痛手は大きく、Théâtre du Marais は閉鎖の危機に立たされるに至る。そして、1673年4月、座長の死にともなう存続の危機に立たされた Palais Royal と合併し、新たに Théâtre Guénégaud を結成する。

1630年代には Corneille の悲喜劇・悲劇の上演で、1640年代からは Jodellet 演ずる喜劇の上演で観客を集めた Théâtre du Marais は、1660年代には大スペクタクル劇で Paris の観客を楽しませている。しかし、Hôtel de Bourgogne が悲劇で名声をえながら数多くの喜劇を上演したように、Théâtre du Marais も、Chevalier, Rosimond による喜劇を数多く舞台にのせている。初演された作品数だけから判断すれば、ここでも、喜劇が他のジャンルをはるかにひきはなしている。これは、演劇を興行の点から見た場合、その時代の風潮に敏感に対応していくことが要求されることを示しているといえよう。

我々はここまで、Paris の三大劇団の上演題目について、主に Molière の劇団に焦点をあてながら見てきた。Hôtel de Bourgogne の劇団は悲劇を中心としながら Raymond Poisson 演じる喜劇を、Théâtre du Marais は大スペクタクル劇に活路を見出しながらも Chevalier や Rosimond の演じる喜劇を多数舞台にのせ、逆に、Molière の劇団は、喜劇の上演に定評があるにもかかわらず、Racine や Corneille の悲劇を上演している。これは、一つには先ほど述べたように興行的側面で説明されることができる。Hôtel de Bourgogne や Théâtre du Marais のレパートリーに喜劇が多く見られるのは、当時の演劇界が喜劇に人気が集まっていたためであり、また、初期の Molière が悲劇を多くレパートリーに置いていたことも、その時代にはまだ喜劇に対する人気はまだそれほど高くなく、悲劇が愛好されていたからであろう。しかし、Molière の劇団が1660年代後半に悲劇を上演したことの説明としては不十分である。では、この問題はどのように説明すればよいのであろうか。そこで次に、我々は Molière の劇団の役者たちに目をむけ、この点について考えてみよう。

III

Molière が再び Paris でデビューを飾った1658年秋に、一座は彼の他に Joseph Bérart, Louis Bérart, Dofresne, Du Brie, Du Parc の男優と、Madeleine Bérart, M^{lle} Hervé, M^{lle} De Brie, M^{lle} Du Parc の女優をあわせて計10人の役者で構成されていた。しかし、1659年春にこの中から Dufresne が引退、Du Parc 夫妻が Théâtre du Marais に移籍し、かわりに、同じThéâtre du Marais から Jodelet と L'Epsy の2人が加入、さらに、地方の劇団で活躍していた La Grange と Du Croisy 及び M^{lle} Du Croisy も加わり、計12人に増加した。しかし、喜劇役者として人気の高かった Jodelet は翌年春にこの世を去り、また、古くからの仲間 Joseph Bérart も亡くなるが、1660年にはじまるシーズンには、一度、一座を離れた Du Parc 夫妻が再び戻り、Jodelet らの穴を埋めた。特に Du Parc は、その丸顔を白く塗りあげた姿が人々の

1984. 5 La Grange の *Registre* から見た座長 Molière (日比野) 87 (87)

人気を集め、Gros-René として Jodelet にかわる喜劇役者の地位を占めることになる。また、1662年には再び Théâtre du Marais から La Thorillière と Brécourt の2人が新たに加わり、さらに翌年には Molière と結婚した Armande Béjart も役者としてデビューし、計15人の大所帯にふくらむ。しかし、1663年春には L'Epsy が引退し、また翌1664年春には悲劇に定評のあった Brécourt が Hôtel de Bourgogne へと移っている。再び Théâtre du Marais から Hubert が加わるが1664年には一座の花形喜劇役者 Du Parc が世を去り、また、M^{lle} Du Croisy も1665年春には引退している。さらに、1667年春には、*La Thébaïde* や *Alexandre le Grand* でも好演した M^{lle} Du Parc が Racine に請われ、Hôtel de Bourgogne へと移っている。その後しばらくは団員の移動も見られないが、1670年の春になるとまず Louis Béjart が引退、それにかわって Baron, Beauval, M^{lle} Beauval の3人が新たに加わっている。そして Molière の死の1年前の2月に、Molière の劇団結成以来の同志でもあった Madeleine Béjart を失っている。

1659年に新たに加わった Jodelet は、よく知られているように、1640年代以降、Paris の演劇界の人気者となり、彼を主人公とする作品が数多く書かれている。Molière の一座のレパートリーにも Pierre Corneille の *Le Menteur*, Scarron の *Jodelet maître écolier*, Thomas Corneille の *Jodelet prince* が見られる。また、1659年秋には Molière 自身、彼を実名で *Les Précieuses* に登場させてもいる。しかし、彼は1年足らずでこの世を去り、劇団を代表する笑劇役者は Du Parc にひきつがれる⁽²³⁾。Gros-René として舞台に登場した Du Parc は、Jodelet 同様、彼の名が冠せられた笑劇 *Gros-René écolier* の主人公として、また、*Le Dépit amoureux* でも Gros-René として活躍した。Jodelet と Du Parc の二人はこのように、Molière の一座では、一つの決まった人物を演じる伝統的笑劇役者であった。

Jodelet と同じ時期に入った La Grange は、対照的に、その態度の優

美さから即座に一座を代表する役者となり、多くの作品の主役を演じ人気を博した。Molière の劇団のために作品を書いたこともある同時代の劇作家 Chappuzeau は彼を次のように評している。

Il passe avec justice pour tres bon Acteur, soit pour le sérieux, soit pour le comique. ⁽²⁴⁾

彼は *L'Ecole des femmes* の Horace, *Dom Juan* のタイトルロールなどの他, Corneille の *Tite et Bérénice* でも演じている。悲劇での演技もかなり評価されていたようである。当時の批評家 Robinet は *Tite et Bérénice* に関し、一座の男優であった La Grange, Hubert, Du Croisy が

Y font très-bien leur personnage
Et dans un brillant équipage. ⁽²⁵⁾

であったと記している。

1662年に Théâtre du Marais から移った La Thorillièrre は, Molière の劇団でも悲劇の中の国王役を演ずることが多かったようである。*Alexandre* の Porus, *Attila* のタイトルロール, *Tite et Bérénice* の Tite を当り役とし、喜劇では端役が中心であった。1662年から1664年まで在籍した Brécourt も喜劇役者としてより悲劇役者としての評価が高く、喜劇を主に上演する傾向のあった Molière の一座では活躍の場が少なかった。そのため、悲劇を多く上演する Hôtel de Bourgogne へと移ったようである。

1670年に加わった Baron は、後に17世紀後半を代表する役者の一人に成長するが、Molière の劇団でも華々しい活躍を見せている。*Tite et Bérénice* では Domitien, *Psyché* の Cupidon, そして、病で倒れた Molière の代役として *Le Misanthrope* の Alceste を演じ、高い評価を受

けていたようである。

一方、一座を代表する女優の一人 Madeleine Béjart は、かつて *Illustre Théâtre* 結成以前には *Théâtre du Marais* にもいたことのあるかなり名の知れた悲劇役者であった。Tristan l'Hermitte の *La Mort de Sénèque* では Epicharis を、Corneille の *Andromède* では Andromède と Junon の二役を⁽²⁶⁾、また、Racine の *La Thébaine* では Jocaste を演じたことが知られている。喜劇では主に侍女・女中役を演じていた。

1650年に加わった Catherine De Brie もまた、美しく優雅な姿で一座を代表する女優であった。Molière の喜劇では *L'Ecole des femmes* の Agnès など、女性の中では最も重要な役、あるいは *Le Misanthrope* の Eliante のように中心人物とはいえないまでも魅力に満ちあふれる人物を演じている。Corneille の *Andromède* と *Psyché* では Vénus を演じているが他の悲劇では何を演じていたかはわからない。

M^{lle} De Brie よりわずかおくれる1653年に入った M^{lle} Du Parc はすぐれた踊り手として知られるだけでなく、悲劇女優としても名をはせている。1659年には Corneille の勧めで一時的に *Théâtre du Marais* に移り、また、夫の死後の1667年には Racine の *Andromaque* を演ずるために *Hôtel de Bourgogne* に移っている。Molière の一座では Racine の *Alexandre* の Axiane など悲劇の女主人公を演じ、また、喜劇では、*La Critique de l'Ecole des femmes* の Climène のような気取り屋を演じることが多かった。

Armande Béjart すなわち M^{lle} Molière は、背も高くなく、また目が小さく口が大きい点で女優としての外見はそれほどではないが、持ち前の気ままな雰囲気と、その知性的な眼差し、表現の自然さで人気のあった女優である。*Le Misanthrope* の Célime, Racine の *Alexandre* の Cléofile, Corneille の *Attila* では Flavie, *Tite et Bérénice* では Bérénice を演じている。

我々はここまできて、一つの驚くべき事実に注目せざるをえない。というのも、Molière の劇団は、1658年の Paris デビュー以来喜劇を演ずることで評価の高かった劇団であるにもかかわらず、Jodelet, Du Parc の死後、彼らにかわる喜劇役者が存在しないからである。確かに、かつて Scaramouche の弟子と呼ばれ、数多くの喜劇で主人公を演じつづけた座長の Molière がいる。しかし、初期には *commedia dell' arte* やフランスの フェルスの伝統に根ざす *Mascarille* や *Sganarelle* を演じた Molière は、Jodelet や Du Parc, あるいは同時代に活躍した *Hôtel de Bourgogne* の *Crispin*, *Théâtre du Marais* の *Chevalier* のように、一つの決められた型をいくつもの作品の上で繰り返す人物ではなく、*L'Ecole des femmes* の *Arnolphe*, *Le Tartuffe* の *Orgon*, *Le Misanthrope* の *Alceste*, そして *Le Malade imaginaire* の *Argan* に至るまで、全て日常の世界にも見出すことのできる「生きた人間」⁽²⁷⁾ を演じる役者へと変貌をとげているのである。⁽²⁸⁾

この「典型的人物」から「生きた人間」への変化は、また、Molière の一座が度々批判された「自然な演技」についてもいえる。当時の悲劇役者が歌うように声をふくらませ、聞きどころでは劇の流れを無視し、表現の限りをつくしたことはよく知られている。当時の花形役者の一人 *Montfleury* は、舞台上での過度の表現がもとで死んだともいわれている。⁽²⁹⁾ これに対し、Molière の一座の役者たちは、*Les Précieuses* の中で *Mascarille* がいうように、「人が話すように話し」⁽³⁰⁾、自然な表現を心がけて演じていた。また、それは、役者が登場人物と同一化することを要求するものでもあった⁽³¹⁾。さらに、当時の舞台では、両袖に貴族たちの席がしつらえているため、役者は一般に、他の役者の存在とは無関係に正面を向いて演じる傾向があったが、Molière の一座の役者たちは、観客席に横顔を見せて、すなわち、他の役者とむきあう位置で演じていたようである⁽³²⁾。

Molière の一座はこのように、喜劇においても悲劇においても、様々な点で *Hôtel de Bourgogne* の役者たちの演技とは異なる性質を示してい

たのである。

*

*

*

Paris で再び活躍をはじめたころから、常に喜劇の世界での第一人者の位置を占め、当時悲劇の勢いにおされ影のうすくなっていた喜劇を復活させ、しかも、喜劇では高い評価を受けていた Théâtre du Palais Royal は、数のうえでは減少するもののほとんど毎年のように悲劇の新作を舞台にのせてきた。La Grange をはじめとする役者たちは、Hôtel de Bourgogne の悲劇役者たちのような極めて個性の強い花形役者とは異なり、自然な演技を身上とするある面では平凡な役者の集まりであったかもしれない。悲劇の上演を得意とする Hôtel de Bourgogne と比べれば、Palais Royal の悲劇は多少見劣りしたかもしれない。しかし、だからといって、Molière の一座が悲劇の上演には全く不適合であったとするのは、あまりにも一面的な見方であろう。種々の事情があるにせよ、Racine は *La Thébaidé* と *Alexandre le Grand* の初演を Molière の一座に託したのであり、また、Corneille は *Attila* と *Tite et Bérénice* の初演を許し、また、¹そのうち *Alexandre*, *Tite et Bérénice* は一座の上演記録の点から見ても成功といえる結果をもたらしているのである。そして、さらに、Molière, Corneille, Quinault の合作による tragédie-ballet, *Psyché* の爆発的な成功へとつながることからすれば、Molière の一座は、いわゆる伝統的な悲劇の上演様式では確かに十分な成功をおさめなかったとしても、悲劇そのものの上演に関しては十分通用する力をそなえていたといえそうである。

また、このように悲劇の世界を常に視野の中に入れながら、生きた人間の登場する喜劇を書きつづけた Molière の世界は、後の市民劇を予告するものであることはあらためてつけ加えるまでもないことであろう。

註

- (1) 1658年に Paris に戻り、国王ルイ十四世の前で Corneille の *Nicomède* と彼の作と思われる *Le Docteur amoureux* を演じ大成功をおさめた後、1660年10月11日までは Petit Bourbon を拠点とし、翌1661年1月20日からは Palais Royal を拠点としたが、一般には後者の名を冠して呼ぶことが多い。ここでも通例に従った。
- (2) Paris, Félix Alcan, 1928.
- (3) Paris, Mercure de France. ここでは 1972年版を用いた。
- (4) *Revue d'Histoire du Théâtre*, 26^e Année, 1974-1.
- (5) *XVII^e siècle*, N^o 132 (33^e Année, N^o 3, 1981).
- (6) *L'Impromptu du Versailles*, sc. 1.
- (7) cf. Sylvie Chevalley, *Molière en son temps*, Genève, Minkoff, 1973, pp. 45-68
- (8) Pierre Corneille の *Andromède* の刊本中に Molière の自筆による配役名の書きこみが見られる。cf. Chevalley, *op. cit.*, p. 51.
- (9) Molière が Paris に戻ったのは1658年秋であるが、1659年春までに上演された作品に関しては不明の点が多く割愛した。
- (10) B. E. Young et G. P. Young, *Le Registre de La Grange*, 2 vol., Genève, Slatkine Reprints, 1977 (réimpression de l'ed. de Paris, 1947).
- (11) Molière 一座の上演作品名及び回数については既に前記 Chevalley の研究書の付録に掲載されているが、彼女のものは年度毎ではなく、また、それぞれの作品の成功度についてはふれられていない。
- (12) *Le Médecin malgré lui* は53回の公演のうちわずか3回ではあるが単独での上演が記録されている (1667年10月28日, 29日, 1668年8月19日)
- (13) S. Wilma Deierkauf-Holsboer, *L'Histoire de la mise en scène dans le théâtre français à Paris de 1600 à 1673*, Paris, Nizet, 1960. p. 31.
- (14) Du Ryer の *Alcionée* も非常に高い数値を示しているが、これも *Précieuses* とあわせて上演されたものである。
- (15) Georges Couton, *Œuvres complètes de Molière*, «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol. Paris, Gallimard, 1976. t. I, p. 478.
- (16) この点については、Hôtel de Bourgogne の役者たちの発声も次第に自然なものに変わりつつあったとする Vincent de Paul の証言 (1657年) があるようである。cf. Martine Clermont, *L'Acteur et son jeu au XVII^e siècle: Ses rapports avec le personnage qu'il représente* in *Revue d'Histoire du Théâtre*, 1981, 33^e Année N^o 4.
- (17) かなり以前から Molière 自身は悲劇に出演していなかったようである。また、

Corneille は *Tite et Bérénice* の成功には満足しておらず, Hôtel de Bourgogne で上演されたならばより大きな成功があげられたと考えていたらしい。
cf. Maurice Descotes, *Les Grands rôles du théâtre de Corneille*, Paris, P. U. F., 1962. p. 20.

- (18) Jacques Scherer の研究によれば, 一幕物を除く喜劇の出版数は1650—59年には35作品であったが, 1660—69年には52作品に増加し, また一幕物は6作品から52作品に増加している。悲劇は32作品から40作品へと増加しているが, 喜劇ほどの著しい変化は見られない。cf. J. Scherer, *La Dramaturgie classique en France*, Paris, Nizet, 1973. Appendice IV, Popularité des divers genres du théâtre aux différents époques du XVII^e siècle, pp. 457-459.
- (19) S. Wilma Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, 2 vol., Paris, Nizet, 1968-70.
- (20) *ibid.*, t. II, p. 136.
- (21) S. Wilma Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre du Marais*, 2 vol., Paris, Nizet, 1954-58.
- (22) *ibid.* t. II. p. 176.
- (23) Jodelet 亡きあと, *Les Précieuses* の Jodelet 役を演じたとする説もあるがはっきりしたことはわからない。cf. R. Bray, *Molière, homme de théâtre*, Paris, Mercure de France, 1972. p. 235.
- (24) B. E. Young et G. P. Young, *op. cit.*, t. II, p. 80.
- (25) *ibid.*, p. 81.
- (26) 二作品とも Paris で上演された形跡はない。
- (27) *La Critique de l'Ecole des femmes*, sc. 6.
- (28) Roger Herzog, *Le Jeu<naturel>de Molière et de sa troupe*, in *XVII^e siècle*, N° 132, p. 282.
- (29) *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, t. II, pp. 135-136.
- (30) sc. ix.
- (31) cf. Martine Clermont, *op. cit.*,
- (32) cf. André Villiers, *L'acteur Molière et l'expression tragique*, in *Revue d'Histoire du Théâtre*, 25^e Année, 1974-1.